

評価委員会総合評価

研究課題名：高精度な津波数値計算結果を用いた津波の地域特性の理解

評価委員

委員長：小泉 耕

委員：石井雅男、永戸久喜、牛田信吾、山中吾郎、山田雄二、瀬古 弘、
清野直子、須田一人、干場充之、吉田康弘、加藤輝之、川添安之

評価年月日：令和4年1月26日

1. 総合評価

- 非常に優れた研究であった。
- 優れた研究であった。
- 研究を実施した意義はあった。
- 失敗であった。

2. 総合所見

本研究は、津波数値計算の予測精度向上と各地域における津波特性の理解を通じて、気象研究所における当該研究と地方官署における津波関連業務及び人材育成の双方の推進に資するものであり、それぞれの観点において期待される成果が得られたと考える。また、高分解能の津波数値計算が地方官署の環境で完結して実施していることや、Web ツールやオンライン環境等を活用するなどして効果的・効率的に実施した点は高く評価できる。地方官署の人材育成という点からも評価できる。研究目標の設定も、地方官署の技術力を考えると妥当であり、津波モデルの格子間隔を3.3秒や2秒にして計算することにより現業モデルで分からなかった多くの知見を得て、さらにその結果を地震火山技術検討会や管区研究会等で発表し、著作物として残した点も評価できる。地方官署の人に、その地域で発生する津波の特性について理解を深めてもらうという、地域ハザードを考えていく上でも意義のある研究であったと考える。

以上のことから、本研究は、概ね適切な目標設定と研究体制のもとに実施され、想定通りの成果が得られた優れた研究であったと評価する。

なお、今後の成果の活用にあたっては、以下に留意して、取り組んで欲しい。

- ・本庁と協力して研究内容や津波数値計算の実施方法が容易に理解できるサイトを設定してもらいたい。
- ・津波後の現地調査と比較・検証を行うことまで発展できれば、関係機関や地元住民らが行う津波防災活動に対して有益な情報となり得るものと期待できる。
- ・トンガ噴火による潮位変動や遠地津波など、統一的なソースでもやってみると、より地域特性の知見が得られるかもしれない。
- ・異なる震源域の事例解析を積み重ねて研究を発展させ、地域のハザードマップの作成に活かすなど、成果の活用につなげてほしい。